

令和 4 年 6 月 4 日現在

機関番号：11401

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2021

課題番号：18K12192

研究課題名（和文）「危害」概念をベースにした「常識的」動物倫理の基礎構築

研究課題名（英文）Commonsensical Animal Ethics Based on the Concept of Harm

研究代表者

吉沢 文武 (Yoshizawa, Fumitake)

秋田大学・高等教育グローバルセンター・講師

研究者番号：20769715

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、人間による人間以外の動物の倫理的扱いに関して、「危害」の概念に注目し、特定の倫理理論に基づくのではない、常識的な動物倫理の可能性を探るものである。とくに、本研究では、畜産における人間による動物利用の倫理的問題を中心に、動物に対する不必要な危害を避ける倫理的菜食主義がいかに受け入れられるか、畜産のために動物を生み出す行為を危害と捉えうるかの検討を行なった。さらに、発展的な研究として、動物に限定されない生殖倫理のテーマとして、子どもをもうけるべきでないという反出生主義の批判を行なった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、「まともな理由なく危害を加えるべきではない」という常識的な考えを基礎に、人間による動物の扱いの倫理的是非を捉え直すものである。菜食主義への関心は、環境問題への関心もあいまって、高まりつつあると思われる。そうした私たちの食選択や、畜産や食肉産業を支える消費選択を振り返るさいに、日常的な思考のなかで用いることのできる原則として、「危害」を避けることへの配慮を本研究は提示している。また、生命を生み出すという選択をめぐる本研究の議論は、現実の問題をめぐる、生殖に関する生命倫理学の基礎として、参照することが可能である。

研究成果の概要（英文）：The main aim of this research project is to explore the possibility of commonsensical animal ethics based on the concept of "harm" that is not based on a particular normative ethical theory. Primarily, I examine the ethical problems regarding the use of animals in animal husbandry: How our society accepts the thought of ethical vegetarianism based on avoiding harming animals and whether procreating animals for food can be regarded as harming them. Further, I critique anti-natalism--according to which procreation, not limited to animals, is always wrong--as a developmental study.

研究分野：哲学・倫理学

キーワード：動物倫理 危害 生殖倫理 菜食主義 ベジタリアニズム

### 1. 研究開始当初の背景

本研究の開始前、「危害(harm)」概念の理論的分析に取り組んできた。その議論は、「死の哲学」や「生殖倫理」における領域で盛んに行なわれてきた経緯がある。同時に、動物倫理の研究も進めてきたが、その議論のなかで、危害概念の理論的検討が十分になされていないと思われた。とくに、動物倫理において広く用いられる「危害」の理解では、動物が被る死が、危害と見なされない点が大きな問題だと認識したことが、研究の着想に至った主な経緯であった。

### 2. 研究の目的

当初の目的は、理論的な洗練化が進んだ「危害」概念に基づいて、広く受けいれられる「常識的」な動物倫理を基礎づけることが可能かを問うことだった。それを通して、動物利用に対する賛成派・反対派双方による建設的議論を可能にする「常識的」動物倫理の基礎の構築に寄与することが研究の目的であった。

### 3. 研究の方法

動物倫理において適切な危害概念の理解の解明を進めるために、3つの下位課題に分けて検討を進めることとした。(1)動物倫理に対する標準的な危害理論の適用可能性を検討する。(2)動物倫理において固有な危害理解とその背景の特定を行なう。(3)危害概念をベースにした「常識的」動物倫理の基礎の構築を目指す。

### 4. 研究成果

#### (1) 出版された成果ごとの区分に沿った報告(1/2): 動物倫理の研究

本研究の問いに答える中心となる成果は、(a)菜食主義についての記事が刊行されたこと、(b)「菜食主義」の項目を執筆した事典が刊行されたこと、(c)畜産動物などを生み出すことの倫理的な是非を論じた査読論文が刊行されたことである。

(a) 吉沢文武 2019、「大学のなかのベジタリアン」、『日本科学哲学会ニューズレター』55巻、5-9頁。

学会ニューズレターの記事ではあるが、倫理的理由に基づく菜食主義(ベジタリアニズム)について、食事をとる機会が制限されることなど、大学や学会において起こる問題をいくつかまとめ、解決の方針についても一定の提案を行なった。口頭の会話やSNSによるものではあるが、反響もあり、活動的側面が不可分である動物倫理の研究として、アウトリーチに留まらない成果と捉えられると考える。本研究の関心の中心である動物倫理の「常識的」理解の一側面を再検討してまとめることもできたと考える。

(b) 吉沢文武 2021、「菜食主義」、野林厚志(編集委員長)『世界の食文化百科事典』、丸善出版、386-387頁。

「象徴・意味・価値観」という区分において、菜食主義(ベジタリアニズム)の紹介を行なう項目を執筆した。そこでは、食文化としての菜食主義の全般的な特徴を描くなかで、倫理的理由に基づく菜食主義について、「食卓にのぼる肉と、それを得るために動物に加えられている危害との結びつきに気付く」(387頁)ことがその背景にあると説明したうえで、動物に危害を与える以上、食選択には人間の嗜好や文化を超えた「『理由』が必要なのだ」(同上)とまとめることで、功利主義や義務論や徳倫理といった特定の倫理理論を参照せずに、動物倫理を特徴づけることができたと考える。

(c) 吉沢文武 2020、「動物を生み出すことと動物への危害」、『東北哲学会年報』36巻、47-61頁。

本論文が、理論的研究としての本研究の中心を成す。とりわけ畜産において、人間は他の動物を利用する。そうした営為を正当化するために持ち出されることのある(あるいは素朴に抱かれる)理由づけに「埋め合わせ論法」と呼べるものがある。それは、人間が利用するからこそ、利用される動物は(全体として良い生を送りうる場合は)誕生という「利益」を得られるのだから、動物利用のために殺すという「危害」を与えることは許容される、という論法である。

本論文では、ベンサム以来(Bentham 1789)提示されてきた議論のいくつかの代表例をまとめ、従来捉えられてきたのとは異なり、埋め合わせ論法は総量功利主義(福利自体を重視するため、福利がどの個体のものかを問わず、福利の総量の増加を目指す規範理論)に固有の問題ではないということを明確にした。より具体的には、「常識的」倫理を特徴づけたうえで、「埋め合わせ論法」を構成可能だと論じた。そこで特徴づけた「常識的」倫理とは、「利益や危害といった概念を主に用いて道徳的判断を導く」考えであり「すくなくとも、感覚能力をもつ動物(sentient being)に対して、まともな理由もなく危害を加えるべきではない」というものである(53頁)。

その後、特定の規範理論(とりわけ総量功利主義)に基づかない、本稿の特徴づけの意味で常識的倫理の枠組み内で「埋め合わせ論法」を検討するジェフ・マクマーン(McMahan 2008)の議論を検討した。それを通して最終的に指摘したのは、埋め合わせ論法の是非を判断するには、

動物を生み出すという行為の倫理的評価を行なうさいの、適切な単位は何か、という問いに答える必要があるということである。すなわち、食用に畜産動物を生み出すということは、「短い期間で死ぬ生を生み出す」という行為として捉えることもできれば、「生み出す」という行為と捉えたうえで、殺害を別の行為として捉えることもできる。どちらで捉えるかが、「生み出す」という行為の道徳的評価を決定的に左右するよう見える。

本論文から得られる示唆は、次である。畜産および肉食は、規模の点から言っても、歴史や身近さの点から言っても、動物倫理における最も中心的なテーマである。その問題の根底には、誕生と死の評価をどう捉えるかという問題があると指摘できる。この点を解明するためには、危害概念を動物に適用可能かという当初の目的から離れ、危害をめぐる理論的な検討に再度戻る必要がある。

以上の(a)から(c)によって、本研究のひとつの結論を示せたと考える。危害概念は、動物倫理においても適用可能である。とりわけ(c)の論文において、「危害」概念を用いた「常識的」倫理の特徴づけを行なった。そのうえで、死と誕生がどのような意味でそれぞれ危害と利益と評価しうるかを整理し、動物を生み出すことをめぐる議論を再構成し、その概念が議論に用いることのできる有用なものだということを一定程度示すことができたと考える。現代倫理学における難問のひとつと考えられている「動物を生み出すこと」の是非をめぐる問いに対して、ひとまずは、危害の概念に基づいて論じることはできたと言える。

しかしながら、動物倫理について、危害概念をベースに展開することが妥当だという方向性は示せたとはいえ、こうした描像を体系的に本研究として示すことまでは至らなかった。その背景的な事情としては、危害概念の研究を踏まえると、危害の概念を適用することは可能だということに疑いを挟む要素があまりないと確認したこともある。それは、危害の概念が、福利の理論に中立的でなければならないという理論が目指すべき望ましさ(Bradley 2012, p. 394)が共有されていることに由来している可能性もある。すなわち、人間と動物の福利を統一的に説明できる理論に対しても中立的でなければならないはずだからである。いずれにしても、体系的に研究するとすれば、既存の文献をサーヴェイする以上の、新規な論点を提示する論文にまとめることは難しいと思われた。もちろん、「理由なく危害を与えてはならない」という原則を中心に、動物の扱いに関する様々な法規やガイドラインを整理し直すといった作業は実りあるものだと思う。その課題はまだ果たされていないため、今後も課題として取り組みたいと考える。

## (2) 出版された成果ごとの区分に沿った報告(2/2): 生殖倫理の研究

上記(a)から(c)で見た方向性から離れ、生殖倫理という、より抽象的で理論的な領域のテーマにも取り組んだ。またそれは、動物倫理というよりも、人間と動物を含めた誕生をめぐるより一般性のあるテーマへの移行でもある。そのきっかけのひとつとなったのは、(c)の論文をまとめる過程で、次の認識を強めたからである。すなわち、個別の出来事が危害か利益かを評価する方法については、盛んな議論があるのに対して、死が危害だとして、誕生が利益だと捉えた場合に(利益の概念も、危害の概念の対応物として定義される)、その2つの出来事ないし行為の倫理的評価の相互関係をどう捉えればよいのか、既存の危害の理論をめぐる議論のなかでは、ほとんど論じられていないと思われる。畜産という、現代における動物利用の核となるような実践をめぐるこの問題は、動物倫理にとっても、危害の概念の適用に関しても、急所になるはずである。加えて、独自性の高い研究として形にできる見込みがあったことも、生殖倫理の研究に注力した理由である。その成果が以下の(d)である。

## (d) Yoshizawa, Fumitake 2021, "A Dilemma for Benatar's Asymmetry Argument," *Ethical Theory and Moral Practice* 24, 529-544.

本論文では、デイヴィッド・ベネターによって *Better Never to Have Been* のなかで提出された、子どもをもうけることは倫理的に不正だとする「反出生主義(anti-natalism)」を支持する議論のうち、とくに哲学者のあいだで大きな論争を巻き起こした「非対称性に基づく議論」を批判的に検討している。ベネターが妥当な原理として提示する「価値論的非対称性」によれば、人生のなかで害悪が生じることは、害悪が生じないことより劣るが、利益が生じることは、利益が生じないことに対して勝る価値をもつわけではない。ベネターによれば、この「価値論非対称性」に基づいて、広く私たちが受けいれている「生殖の義務に関する非対称性」(正確には、加えて3つの非対称性)が説明される。それは、もし生まれてくる子どもの人生が、酷くつらいものになるのであれば、妊娠を差し控えるべき理由があるが、生まれてくる子どもの人生が幸せなものになるからといって、そうした子どもをもうけるかは、倫理的にどちらでもかまわない、というものである。本論文が示すのは、説明力を示そうとするベネターの議論がジレンマに陥るということである。

ジレンマを構成するために必要となったのは、(c)で危害の概念の理論的課題として捉えた、どのような単位で誕生を評価すればよいのかという点と通底する観点である。本論文のもととなった研究は、研究分担者として参加する分析実存主義に関する研究プロジェクトとも関連し、本研究としても、基礎的な概念の研究として位置づけて進めていたものである。そのなかで、ベネターの議論を批判する議論を構成する材料と、誕生の価値を評価する過程において、関わる諸要素の順序が重要だという萌芽的アイデアは揃いつつあったものの、決定的な批判を構成する

には至っていなかった。別々の出来事の評価の相互の関係をいかに考えるかという(c)で示した論点とは異なるものだが、(c)の検討を通して、評価の単位に注目すべきだという着想が見込みあるものだという考えが決定づけられた。

具体的には、本論文が着目したのは、価値論的非対称性によって別の非対称性が説明されるという、ベネターによる当の説明に深刻なギャップが含まれるというものである。というのも、価値論的非対称性は、人生のなかで生じる個々の害悪や利益について成り立つ価値評価であったのに、それを用いて説明されている別の非対称性は、人生全体の価値評価について述べるからである。そのギャップを埋める説明をベネターはさらに提出する必要がある。つまり、説明のどこかの段階で、人生全体の価値評価を求める必要があるわけである。

ギャップを埋める方法は二通りある。第一に、先に人生全体の評価を定めてから、価値論的非対称性を用いてさらなる比較的评价を導けば、たしかに価値論的非対称性によって、すでに受けいれられている別の非対称性は説明される。だが、そのときには、反出生主義を導くことができない。なぜなら、反出生主義を導く鍵となっているのは、人生全体の価値ではなく、価値論的非対称性を個々の害悪や利益に直接当てはめることにあるからである。こんどは、第二に、ベネターがもとより行なっているように、個々の害悪や利益に対して価値論的非対称性を当てはめれば、反出生主義は導かれる。しかし、その結論は、全体として幸福な人生を送る生をもたらすことは、倫理的にどちらでもかまわないという、広く受けいれられている生殖の義務に関する非対称性ではない。

なお、本論文に先立ち、本研究の成果として、ベネターの議論について、以下の解説的論文を刊行している。

吉沢文武 2019「生殖の倫理 ベネターの反出生主義をどう受けとめるか」『現代思想 特集 = 倫理学の論点 23』第 47 巻第 12 号、129-137 頁。

### (3) 総括と展望

(a) から (d) の論文を中心的成果とする本研究の全体像は、当初の描いていたものとは異なる。それは主に、第一に、危害概念に基づく動物倫理の構築に寄与することが当初の目標であったが、別の方向への発展に舵を切ったことによる。動物倫理の研究としては、その目標が、背面に退いた形になる。学術研究においては当初予期しないことが起こるという認識で進めるとはいえ、動物倫理の研究を進めるか、生殖倫理の研究に注力し確かな成果に結びつけるかは、非常に悩ましい判断ではあった。ただし、先に(1)の最後に述べたように、当初の方針を保つことでは、文献調査を中心とした論文にまとめる以上の仕方では、新たな知見を加えて、顕著な成果にまとめることは難しいと判断した。結果としては、知名度をもつ国際誌への論文掲載を実現でき、また、新たな研究計画の構想へと繋げることができた。動物倫理の研究は、成果として刊行できていないものもあるため、継続したい。

展望として、生殖倫理に関して得られた成果は、引き続き、研究代表者として進めるプロジェクトのなかで、より特定したテーマのもと、探究を進める。また、研究分担者として参加する分析実存主義に関わるプロジェクトとの相乗効果も一層見込まれる。危害概念の検討は、継続する研究の基本概念にもなっているため、今後も進める。将来的には、それらで得られた成果をもとに、誕生と死の利益・危害という評価に関する見解をまとめ、動物倫理への再接合を計りたい。

参考文献 \* 参照自著文献は本文中に表示

Bentham, Jeremy 1789, *An Introduction to the Principles of Morals and Legislation*, in John Bowring ed. 1838-1843, *The Works of Jeremy Bentham*, vol. 1, William Tait.

Benatar, David 2006, *Better Never to Have Been: the harm of Coming into Existence*, Oxford University Press.

Bradley, Ben 2012, "Doing Away with Harm," *Philosophy and Phenomenological Research*, 85 (2), 390-412.

McMahan, Jeff 2008, "Eating Animals the Nice Way," *Dædalus*, 137(1), 66-76.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 Fumitake Yoshizawa	4. 巻 24
2. 論文標題 A Dilemma for Benatar's Asymmetry Argument	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Ethical Theory and Moral Practice	6. 最初と最後の頁 529-544
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s10677-021-10186-4	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 吉沢文武	4. 巻 36
2. 論文標題 動物を生み出すことと動物への危害	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東北哲学会年報	6. 最初と最後の頁 47-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 吉沢文武	4. 巻 47
2. 論文標題 生殖の倫理 ベネターの反出生主義をどう受けとめるか	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 129-137
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉沢文武	4. 巻 55
2. 論文標題 大学のなかのベジタリアン	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本科学哲学会ニュースレター	6. 最初と最後の頁 5-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 4件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 吉沢文武
2. 発表標題 動物を生み出すことと動物への危害
3. 学会等名 東北哲学会 第69回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 吉沢文武
2. 発表標題 人生の意味と死の哲学
3. 学会等名 死生心理学研究会（令和元年度第1回）（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Fumitake Yoshizawa
2. 発表標題 Internal and External Relations between Death and the Meaninglessness of Life
3. 学会等名 Meaning of Life International Conference（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 吉沢文武
2. 発表標題 死によって何が剥奪されるのか
3. 学会等名 人文死生学研究会（第17回）（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Fumitake Yoshizawa
2. 発表標題 What exactly is the Asymmetry of Procreational Duties (that is Allegedly Explained by Benatar's Basic Asymmetry)?
3. 学会等名 Seminar on "Meaning in life" and Analytic Existentialism Meeting with David Benatar and Thaddeus Metz (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Fumitake Yoshizawa
2. 発表標題 Lacking Properties and Zero Well-Being
3. 学会等名 Workshop: Philosophy of Death and Meaning (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 吉沢文武
2. 発表標題 ベネターとその批判者達
3. 学会等名 シンポジウム「D・ベネター『生まれてこない方が良かった』をめぐって」(招待講演)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 野林厚志(編集委員長)、吉沢文武(分担執筆)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 716(担当2)
3. 書名 世界の食文化百科事典(項目「菜食主義」)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------